邪妖都市妖奇譚　退魔巫女の子宮は蟲毒の器編

……かつてこの国の闇がいまよりも深かった時代、世の中には魑魅魍魎の悪鬼・妖魔たちが溢れかえっていた。彼ら妖怪たちは時代の変化と共にゆっくりとその数を減らしていったが、それでも極一部がしぶとく生き永らえて、まるで泥水を啜るように生を繋いでいた。

時代に再び変化の兆しが訪れたのは昭和の初期頃であった。日中戦争の泥沼化と、欧米列強の包囲網に端を発する真珠湾攻撃、そしてその後に勃発した太平洋戦争の激化に伴って、日本という国は再び暗黒の時代へと突入したのである。戦争によって大勢の人間が死んだが、これによって魑魅魍魎たちは力を取り戻した。

力を取り戻した魑魅魍魎たちは自分たちを信仰する一部の人間たちと手を組んだ。これが後に「邪妖教団」と呼ばれる集団の先駆けとなるのだが、当初からこの集団は危険視されており、戦後に乗り込んできたダグラス・マッカーサー率いるＧＨＱの弾圧によって一度は壊滅の憂い目に遭っているものの、地面に蔓延る雑草のごとく一部が「根」として残ってしまったため、その後、復活を果たすことになる。ＧＨＱによる弾圧の後、集団の生き残りは地下へと潜行し、この過程において、人間と魑魅魍魎の融合が果たされたものと考えられる。今日において「邪妖教団」の名で知られるこのカルト教団の幹部たちは、人の身に魔を宿した「魔人」と化しているからだ。

邪妖教団の活動が公に確認されたのは時代が平成に入った頃だ。バブルが崩壊して日本が空前の大不況に突入したこの時代、日本海

に面する中規模都市・小倉市に教団の本部が設置された。このことに関して地元の住民たちによる反対運動が行なわれたが、その活動はほどなくして終息することになる。反対運動をおこなった住民たちの身に（あるいはその家族たちに）次々と不幸が襲いかかってきたからだ。

反対運動の先頭に立っていた市長の益田順平は、日本では珍しい野犬に襲われて生きたまま内臓を貪り食われ、その家族は通夜に発生した火災によって全員が焼死した。邪妖教団の危険性を追求していたジャーナリストの今際三郎は自ら喉を掻き毟って自死し、住民からの相談を受けていた弁護士の濱田勝也は妻子を自らの手で殺めた後、毒を飲んで自殺した。市民活動家の藤田康之は末期のガンに身体を蝕まれた挙句に苦悶の死を遂げ、教団の本部に石を投げた小学生の宮田大樹は変質者に襲われ腹を裂かれて生きたまま内臓を引きずりだされて殺害された。他にも自身や身内に悲惨なことが起こった者は数知れず、いつしか邪妖教団の存在は口にすることすら恐れられるようになり、人々はただただ自分の身に不幸が降りかからないことを祈りながら生活するようになった。

邪妖教団の巣窟と化した小倉市では怪異の報告が相次いだ。夜になると深い霧が街を覆い尽くし、その中を化け物が闊歩していると噂された。不審死や奇怪死も相次いで、原因不明の病も流行るようになった。全身が紫色に変色し、高熱を発して緑色の吐瀉物を吐き出し、もがき苦しんで死ぬこの病は「小倉病」と命名され、小倉市でのみ発生が確認された。

人々は恐れおののいたが、小倉市を離れようとする者は少なかった。小倉市を離れようとする者は不幸な死を遂げるとの噂が囁かれるようになり、実際に転居しようとした者がその通りになったもの

だから、市民は震え上がって小倉市を離れようとしなかったのである。

邪妖教団による支配は強まる一方だった。教団は市民への布教活動をおこない、大量の信者を獲得した。教団に帰依した者は「死ぬまで教団の奴隷となること」を誓わされ、教団が望むモノであれば財産でも家族でも自らの命でも捧げることを強要された。反発する者はもちろん居たが、そのような者は数日以内におぞましい怪死を遂げることになったから、市民は泣く泣く信者となることを誓い、教団の所有物と化すしかなかった。

集まった大勢の信者たちを前にして、教団は事あるごとに同じ言葉での説教を繰り返した。

「信ぜよ、信ぜよ、ただ信ぜよ。我らに逆らわず、我らに従い、我らに全てを捧げよ。さすれば不幸をその身に迎えることなく死ぬことができるだろう」

これほど絶望に満ちた説教を聞いたことがあるだろうか。どんな宗教であっても「救済」とか「幸福」とか「希望」とか「未来」とか、説教の際にはなんらかの明るい単語をちりばめるものである。ところが邪妖教団の説教にはそれらの要素が一切なく、あるのは「絶望」だけなのである。そしてその「絶望」は、本当の意味で実体を伴ってやってくるため、説教を聞いた者を失意のどん底へ突き落としてやまなかった。

邪妖教団に支配された小倉市は、やがて閉鎖性を高めてゆき、必要最低限の交流以外は控えるようになっていく。平成が終わる年にはまだ存在しているにも関わらず、その一〇年前にはすでに地図上から姿を消しており、近隣の市町村からも忌避されて関わりを持つことを躊躇わせる存在と成り果てていた。

かくして小倉市は邪妖教団のモノとなり、小倉市は次のような異名で呼ばれることになる。

「邪妖都市」

と。

現在、小倉市は邪妖教団の完全な支配化に置かれ、「邪妖都市」の異名で恐れられる存在と成り果てている。邪妖教団による恐怖の支配はすでに三〇年近くに及んでおり、これまでに怪死や不審死を遂げた人間の数は軽く千人を超えるといわれていた。小倉市は日本という国に存在していながらもすでに日本とはかけ離れた存在と化しており、その存在はもはや都市伝説の領域に達しつつあったと言ってよい。実際、ごくまれに、ネット上で小倉市や邪妖教団に関する噂話が囁かれることがあるのだが、そのあまりにも現実味のない内容に「嘘」と断言されることがほとんどだった。

だがしかし、ネット上にあげられる小倉市や邪妖教団に関する情報はほとんど全てが真実であり、それらは邪妖教団に抵抗する勢力によって外部に流されたものであった。

信じられないかも知れないが、邪妖教団に完全に支配された小倉市にあって、まだ邪妖教団に反抗する勢力が確かに存在していた。その数は十数人ほどで、もはや風前の灯のような勢力ではあるものの、小倉市を邪妖教団の魔の手から救い出すため、細々と活動を続けていた。

彼らは邪妖教団に家族や親族を殺された遺族たち構成されており、邪妖教団に活動を悟られないよう、秘密裏に、ひっそりと、小倉市に関する情報を外部に流し、外から助けがくるのを待っていた。

だがこの活動、実は邪妖教団側にはすでにバレている。超常の力

を用いて小倉市を支配する彼らだ。気づかないはずがない。だが、あえて気づかないふりをして、抵抗勢力の活動を野放しにしている理由は、ある辛辣な目的があるからであった。

抵抗勢力が発する情報を「真実」だと見抜ける力を持つ者は、少なからず魔と関わりを持つ者であり、魔力とか、霊力とか、神力とかいった類の「特別な力」を持つ者たちである。狡猾な邪妖教団は、抵抗勢力の活動を「釣り」に見立て、そういった「力を持つ者」がかかるのを虎視眈々と狙っていたのであった・・・・・・。

続きは本編にてお愉しみください。